

コミュニケーション的行為の 理論的考察

——エスノメソドロジーの視座から——

塩 崎 紀 子

1 なぜエスノメソドロジーなのか

エスノメソドロジー (ethnomethodology) は 1960 年代にアメリカで起こった「社会学の新しい展開の一つ¹⁾」である。人々が「ふだんに行ってい

1) エスノメソドロジーがアメリカの社会学の新潮流として、その存在を確立したのは 1960 年代においてである。エスノメソドロジーの創始者ガーフィンケル (H. Garfinkel) が、A. シクレル (A. Cicourel), H. サックス (H. Sacks), D. サドナウ (D. Sudnow), E. ビットナー (E. Bittner), E. シェグロフ (E. Schegloff), D. L. ウィーダー (D. L. Wieder), D. ジンマーマン (D. Zimmerman) ら、まだ若きエスノメソドロジストたちと議論を交わしたカリフォルニアの一連のセミナーがこの新展開の基盤となった。ガーフィンケルの「人を傷つけずに降格させるための条件」(1956 年)、サックスの論文「社会学的記述」(1963 年)、そしてガーフィンケルの著書『エスノメソドロジー研究』(1967 年) はエスノメソドロジーの展開の歩みを示すものと言える。エスノメソドロジーの系統発生については、フッサールの現象学、A. シュッツの現象学的社会学、M. メルロー＝ポンティの現象学、およびウィトゲンシュタインやオースティンらの日常言語学派の言語哲学、チョムスキーの言語理論など数多くの源泉と影響関係が指摘されている。しかも、ガーフィンケルと初期のパールソンズ (T. Parsons) との関係やシュッツとマックス・ウェーバーとの関係などについて現在も解釈と再解釈が繰り返されている。以下を参照。

Roy Turner (ed) *Ethnomethodology* Penguin Education 1974. Kenneth Lei; ter *A Primer on Ethnomethodology* Oxford U.P. 1980. [邦訳] K. ライター (高山真知子訳) 『エスノメソドロジーとは何か』新曜社、1987 年。John Heritage Gar; finkel and *Ethnomethodology* Polity Press 1984. H. Garfinkel *Studies in Ethno; methodology* Prentice-Hall 1967.

る「当たり前の相互行為」の、その「当たり前」を研究する学問である。日常生活の具体的な場面において、私たちは、いったいどのように行われた個々の事象を解釈し、それに正しく反応し、かつ行われたこと全体を理解するのかということ²⁾の探究である。「おはようございます。今日もお暑いですね」で始まった会話では「今日も暑い」は挨拶の一環であり、これに取り立てて反応する必要のないことは日本社会に暮らしている者なら経験的に知っている。また、

A 「今日はどうする」

B 「中村にしとかない？」

のようなやりとりは文脈なしにはとうてい成立しない。食事時で、2人はまだ食事をしておらず、かつ「中村」が寿司屋の名前であるというような相互の了解があってはじめて意味を持つ会話になる。しかし、話者 A・B は発話の場においてお互いの了解事項を確認しあう作業を行うわけではない。さらに、客が店員に品物をさしながら「これ、ください」と言えば、相応の代金を支払って買いたいという言語行為³⁾であることは私たちには自明である。どの場合も話が通じているかどうかをいちいち反省しなくても、意図するところは理解可能で、相互行為は支障なく進行する。エスノメソドロジーはこうした「経験的に知っている自明のこと」を、私たちの生活世界⁴⁾を構成する仕組みとしてあますところなく記述⁵⁾し、記述をと

2) Intersubjektivität (独) 間主観性、共同主観性のこと。

フッサールの現象学の基本概念のひとつ。経験論の次元における個々の自他の共同化ではなく、超越論的次元で自他と共同体の構成によって生起する全体的な主観性を指す。『フッサリアーナ』第 13・14・15 巻参照。

3) 言語行為論における〈発語行為〉〈発語内行為〉〈行為遂行的発言〉〈発語媒介行為〉の区別については以下を参照。J. L. Austin *How to Do Things with Words* Oxford U.P. 1960. [邦訳] J. L. オースティン (坂本百大訳) 『言語と行為』大修館書店、1978 年。

4) 「生活世界」(Lebenswelt) は、フッサールが主として『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』(1936)において展開した概念。科学が指定する「客観的世界」に現象学的還元を施すことによって見いだされる日常的な生活世界、生きられた知覚的経験の世界をさす。E. Husserl *Die Krisis der europäischen Wissenschaften und*

おしてその仕組みを解説しようというものである。

私たちは他者を認める時に、「日本人」であるとか「母親」であるとかの社会的類型を用いて対象化する。また、だれかに向けて、あるいはだれかと共に何かをするという社会的相互行為⁶⁾においては、「だれか」は関係性に応じて「敵」になったり「仲間」になったり、あるいは「見ず知らずの他人」になる。「彼/彼女はだれであるか」という同定作業は記憶と推論に基づいて日常的に出会いの瞬間から行われるのであり、この作業は会う人ごとに不断に繰り返される⁷⁾。こうした同定および同定作業を、私たちは無自覚的にその都度行っているのである。同様に「これは何であるか」「どうやったらいいか」「なぜであるか」などについても、私たちは日常生活のほとんどの局面で、特に考え込むこともなく、経験の流れ⁸⁾に沿って

die transzendente Phänomenologie 1936. [邦訳] フッサール (細谷恒夫・木田元訳) 『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』中央公論社、1974年。

5) エスノグラフィックな記述をさす。民族学的なエスノグラフィーは民族集団の親族、社会関係、政治体系、経済、言語、習俗、宗教、神話など調査者の立てた「客観的」な指標に沿っていくつかの区切られた記述を行い、それらを総合して生活様式の全体をとらえようとする。それに対して、エスノメンドロジーの記述は日常生活を生きる人々が不断に行う解釈や実践的推論のしかたをあるがままに記述しようとする。以下を参照。

Dell Hymes *Foundations in Sociolinguistics-An Ethnographic Approach*; U. of Pennsylvania Press 1974. [邦訳] デル・ハイムズ (唐須教光訳) 『ことばの民族誌』紀伊国屋書店、1979年。

6) 社会的行為。他者に志向し、他者との関係性の中におかれた行為のこと。

M. ウェーバー、T. パーソンズらの社会行為論を参照。T. Parsons *The Social System* 1951. [邦訳] T. パーソンズ (佐藤勉訳) 『社会体系論』青木書店、1974年。

7) 社会行動を他者との相互作用における自己呈示のドラマトゥルギーとしてとらえ、社会をその舞台とみる方法についてはゴフマン (Goffman) を参照。特に、Erving Goffman *The Presentation of Self in Everyday Life* Doubleday & Company Inc. 1959. [邦訳] (石黒毅訳) 『行為と演技』誠信書房、1974年。Encounters Bobbs-Merrill, 1961. [邦訳] (佐藤毅・折橋徹彦訳) 『出会い』誠信書房、1985年。

Behavior in Public Places The Free Press, 1963. [邦訳] (丸木恵祐・本名信行訳) 『集まりの構造』誠信書房、1980年。

8) 「経験の流れ」とは、シュッツが現象学的考察の基点においた概念で、直接的で自発的な生き生きとした経験が不断に現在的な意識の流れとしてあること。

対処することで解決しているのである。社会には成員間に分ちもたれている、または、分ちもたれていると無意識に前提される考え方とやり方があり、それは日常生活のこまごまとした現実を生きることを通じて、成員にそれとなく、しかし強制力を伴って浸透していく。したがって、よく知っているやり方から逸脱した場合、たとえば店員が店を出る客に「どうもありがとうございました」と声をかけ、「どういたしまして」と応じられた場合などに「やり方」は異化⁹⁾され、店員は当惑することになる。こういう、ある社会や集団に属している人々(=エスノ)が無意識に用いている考え方ややり方がエスノメソッドであり、それを探究する学問(=ロジイ)がエスノメソドロロジーなのである。

本研究ノートはシリーズでこうしたエスノメソドロロジーの視座に立って、日本語で行われるコミュニケーションを洗い直すことを目的とする。

研究の焦点があくまでも日本語教育にあることは言うまでもない。日本語教育に携わる者として、教育の現場で教えられている日本語が果たして私たちの現実をどれほど反映しているものなのかを見きわめ、教育に還元できるものがあれば還元したいと願うからであり、従来「日本人のコミュニケーションのしかた」などと呼ばれて提示されることの多い、コミュニケーションの結果のみを固定的状況追隨的にとらえるようなアプローチをいったん棚上げし、私たちが実際のコミュニケーションで何をどう行っているのかという相互行為の生成過程をエスノメソドロロジー的な誠実さで分析する必要を痛感するからである。

9) 「異化」とは「当たり前」と見なされていることの枠組みから、ある要素をはずしたり変えることによって、自明性に亀裂を生じさせること。エスノメソドロジーの方法は「異化」を生じさせることによって日常では意識化されない自明性を取り出す方法である。もともとは V. シクロフスキーにより提起されたロシア・フォルマリズムの基本概念。以下を参照。[邦訳] (新谷敬三郎・磯谷孝編訳)『ロシア・フォルマリズム』現代思潮社、1971 年。原論文は 1925 年発表。エスノメソドロジーの方法としては以下を参照。

H. Garfinkel Op. cit. 註 1)

本稿ではエスノメソドロロジーの基本概念であるインデックス性と相互反映性、ならびに、エスノメソドロロジーの先駆となった現象学的社会学の中からアルフレッド・シュッツ (Alfred Schütz) のレリヴァンス (relevance) についての考え方を考察する。

2 インデックス性 (indexicality) と相互反映性 (reflexivity)

エスノメソドロロジーでは、相互行為における行動やことばの意味は常に発話の状況と文脈により決定されと考え、その特性を「インデックス性」という。日常の会話では、ことばは単語のレベルからひとまとまりの発話および沈黙にいたるまで、文脈に支持されてはじめて、意味を担う表現となる。「たぬき」は、文脈次第で動物にもなればそば屋のメニューにもなり、幼稚園の組分けの名前にもなる。あるいは「たぬき親父」のように人物のある特徴的性向を描写することばにもなる。したがって、

A 「よっちゃんは?」

B 「あれはタヌキよ」

というやりとりはインデクシカルであり、このインデックス性が意味に具体性を付与し、人々に現実感をもたらす。

また、人称代名詞の「ぼく」は日常の言語使用では男の子の1人称代名詞とは限定できない。女の子の「ぼく」や「ぼくちゃん」を使つての自己呈示はしばしば見かけられ、これはエスノメソドロロジーの会話分析では「カテゴリー化」(categorization) の好例となる主題となろう。この場合のカテゴリー化を端的に言えば、女の子の「ぼく」による自己呈示は、権力を背景に持つ支配的な社会文化規定に反する自己規定を女の子が挑戦的に行っていると言え、そこでは「男の子」と「女の子」のカテゴリー化がはたらいっていると考えられる。男の子の1人称代名詞としての「ぼく」が支配的文化規定であるが故に、自己を「ぼくちゃん」と呼ぶような女の子に対して、「おとな」が「へえ、強いんだね」とか「まあ、たのもしい」というような「チェックをいれる」ことはままある。「ぼく」を恒常的に使

う女の子もいれば、気のむくまま適当に使い分ける子もいるだろうが、ある年頃から使わなくなるのも事実である¹⁰⁾。支配的な社会文化規定と権力の行使に関しては、男の子が「あたし」を使った場合を想定するほうがわかりやすいかもしれない。「あたし」と自らを呼ぶ男の子を放っておく親はまずいないと思われるからだ。

テーマをインデックス性に戻そう。ことばと同様に行動の意味も文脈依存的である。頭を掻きながら照れ笑いをする行為を、だれも相手のいないところでしている人間を見て不可解に思わない者は少ないだろう。疑惑を追及され退陣に追い込まれた政治家が記者会見の席で「にこやかな笑み」を浮かべていたら、翌日の新聞の見出しがどうなるかは想像がつくし、身なりの立派な紳士が道幅いっぱいにゆったりとジグザグに歩き始めたらどうだろうか¹¹⁾。ことばについてさらに言えば、「たぬき」や「ぼく」などの単語レベルだけでなく叙述はすべてインデクシカルである。「卒業したら、A社に勤めることになっているんです」というよその子の話を、定職につかずぶらぶらしている息子をもてあます親はどう聞くであろうか。同じ文を、単位欲しさの学生が哀願的装いで担当教授にした場合は、また違う反応を呼び起こすだろう。ことばや行動は文脈に依存し、文脈は異なる次元の文脈にさらに依存する。先の「たぬき」の会話では話者の年齢によって、推測される文脈表示的な意味範囲は会話の開始前から制限を受ける。日本語以外の言語で話された時は、また異なる意味を生じる。このように文脈は過去に遡って開放的である。他方、ことばや行動は文脈依存的に解釈されて反応を呼び起こし、それが新たな文脈を生成する。ことばや行動それ自体も相互に文脈表示的な意味を付加しあう。相手の目を見なが

10) Robin Lakoff *Language and Woman's Place* Harper & Row, 1975.

11) スペインの映画監督ルイス・ブニュエルの映画「エル」の印象的な最終場面。妻に去られた病院で療養生活をおくる夫が面会に訪れた妻に「ぼくはもう大丈夫だ」と応えた後、ひとり病院の敷地内に設けられた散歩道を幅いっぱいにゆっくりとジグザグに歩き去る。

ら「頭が痛かったんです」と言うのと横をむいてふてくされて言うのとでは、ことばの意味するところが異なってくる。これが上司に怠慢を指摘された場合のような、また別次元の文脈におかれた時は、さらに意味は違った展開を見せよう。このように文脈は固定化を阻み、次から次と新展開を見せつつ、無限に生成される。会話では音声レベルの意味付与作用も加わって、その意味情報の多様さは計り知れない。しかし、私たちは日々この意味の無限の生成に立ち会ってそのエネルギーに目をくらませることはない。それどころか喜怒哀楽の感情や無力感、連帯感、孤立感、憎しみ、友愛、信頼感、愛されているという感覚、嫌われているという感じ等々、感じ得る限りを感じ取り、かつは、記憶の貯蔵庫から何ものかを引き出し照合しながら(かかりつけの医者と患者の定期的に交わされる会話¹²⁾等)、あるいはある矛盾する言説に引き裂かれながら(母親が子どもに「勉強しなくちゃ立派な人になれない」と「勉強ばかりしてちゃ立派な人になれない」とを母親の都合で並存的に言い続けるような場合の分裂的二重拘束感¹³⁾等)、または、話を聞いているうちに突然過去のある経験の意味を一気に了解したりしながら会話は進行する。会話の相手を目の前にしての一次的な共通の文脈はメタ共通文脈とでも呼べる次元へ変貌を遂げ得るし、会話の相手とはまったく関係を持たない、ことば自体が喚起する文脈へ飛躍することも可能である。インデックス性はこれらすべての意味の生成を領域におさめる概念である。

インデックス性は社会的リアリティ (social reality) を作りだし、作り出された社会的リアリティは新たなインデックス性を生成し、さらに次の社会的リアリティを創造する。この無限の循環を「相互反映性」と呼ぶ。

12) Robert J. Di Pietro (ed) *Linguistics and the Professions* Ablex, 1982.

13) Gregory Bateson *Steps to an Ecology of Mind* Chandler, 1972. [邦訳] (佐藤良明訳)『精神の生態学』思索社、1990年。

また、会話の場を組織だてる諸々のセッティング¹⁴⁾ (setting) は会話を規定する一方、会話のその時々の意味もまたセッティングを規定していく。「叙述的な発話や行動によって明らかにされるセッティングの相貌は、ただ単にセッティングを詳述するだけではない。それはまたセッティングによって詳述される。¹⁵⁾」相互反映性とインデックス性は視界の相互性を媒介として互いに規定や依存を繰り返す。その繰り返しのうちに、私たちは社会的リアリティを実践的に獲得し、当該社会の社会構造をそれと知らずに私たちの身体に浸透させ受肉化する。談笑で始まった会話の途中で相手に実は癌であると告白されたら、笑って話を続けることはできないであろうし、あれこれと立ち入った質問がなされることもないであろう。話の展開は相手のことばが伝える言表的意味よりも表情やことばの途切れや沈黙などから推察される本意を汲みながらすすめられるのではないだろうか。あるいは子どもが意を決して、親や教師に本人には非常に重大だと思われること（思春期の身体的特徴の変化についての悩みやいじめられていることの告白、またはずっと我慢してきた親の性格上の欠点や教師の癖等々）をおちゃらけながら告げた場合を想定してみる時、話し手と聞き手双方の視界の相互性にとらえられる表情の変化、視線、身振り手振り、無意識のうちの身体の動き、背景などが言語的インデックス性と収斂的または分散的に作用して、その時々 of リアリティ構築に関係することは想像に難くない。このように「相互反映性は循環性によって〈社会的リアリティ〉が意味を帯びるということにとって、本質的¹⁶⁾」なのである。

3 レリヴァンス (relevance)

レリヴァンスとはエスノメソドロジーに大きな影響を与えた現象学的社

14) 原文は setting で、ここではゴフマンの舞台装置=settings の意味あいで行われている。以下を参照。Erving Goffman 1959 Op. cit. 註 1)

15) Kenneth Leiter Op.cit. 註 1)

16) Kenneth Leiter Ibid.

会学者アルフレッド・シュッツが創始した語であり、シュッツの理論で重要な位置を占める概念¹⁷⁾である。シュッツはフッサールの現象学における「生活世界」に着目し、「生活世界」は社会的リアリティが重層的混在的に織りなわされて再構成される「日常生活の世界」「多元的世界」であるとし、人々の社会的リアリティと日常生活の構成に社会学的方法論をもって近接しようとした。エスノメソドロギーはシュッツの開拓した問題意識と領域を受け継ぎ、そこに独自の方法論を掲げて踏み込んだ学問と言える。そのシュッツによる基本概念で、エスノメソドロギーのインデックス性と相互反映性に深く関係すると思われるのがレリヴァンスである。

レリヴァンスは私たちの知覚の領域における主題と周縁の構造化、および私たちの行為や判断における選択作用、ならびに私たちが対象に与える重要性、適切さ、有意性、そして私たちが日常的に行う類型化や知識の関連性までを含む多義的な概念である。この概念は、さしあたり人間の認知行動における関連性志向へ私たちの注意を喚起する。実際、私たちは日常生活の中で私たちに関連があると思われる情報に注意をはらう。コミュニケーション行動はレリヴァンスの期待を生み、その期待は多層的に交差する。この交差する期待に基づいて人々の「解釈」を認識するための基準が構築される。つまり、固定的静態的なコードの「解釈」ではなくて、仮説形成と評価をとおして、秩序立っている社会的リアリティを推論していくのである。また、そのことをとおして、現実を不断に変更し再産出していくことになる。適合性からレリヴァンスへという移行は、とりもなおさず、問身体性と類型化というエスノメソドロギーの核心に触れる概念を呼び起こす。つまり、インデックス性、相互反映性、視界の相互性、レリヴ

17) シュッツの現象学的社会学については以下を参照。Alfred Schütz *On Phenomenology and Social Relations* U. of Chicago P. 1970. [邦訳] (森川眞規雄・浜日出夫訳)『現象学的社会学』紀伊国屋書店、1980年。レリヴァンスについては以下を参照。江原由美子「シュッツにおけるレリヴァンスの問題をめぐって」『社会学評論』第32巻第3号、日本社会学会、1981年。

アンスの形成と交差など、あらゆる相互作用は身体を舞台にして行われるのである。

以上、コミュニケーション的行為を探究するエスノメソドロジーの概念装置を検討してきたが、今後の課題として、第1に、会話分析の重要な概念であるカテゴリー化をハーヴィー・サックス (Harvey Sacks) の仕事を中心に考察し、第2に、ジル・ドゥルーズ (Gilles Deleuze) とロラン・バルト (Roland Barthes) の言語をめぐる研究に引照しつつ、コミュニケーション的行為の理論的枠組を再検討する予定である。